

田殿尾中遺跡発掘調査概報

1990 . 3

(財)和歌山県文化財センター

序

田殿尾中遺跡は有田川下流左岸に所在する弥生時代から室町時代にかけての遺跡であります。

遺跡は昭和28年の水害の際、表土が流失し発見されたもので、昭和56年には遺跡内を横断する道路新設工事に伴って発掘調査が実施され、東西約500m、南北約750mにおよぶ弥生時代を主とした大規模な遺跡であったことが判明しています。

このたび、吉備町が農道を改修することとなり、この工事に先だって、当センターが発掘調査を実施いたしました。

本書は、その成果をまとめた概要報告書であります。地方の歴史をしる上での一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力をいただいた関係各位並びに地元の皆様に深く感謝の意を表し、併せて厚くお礼を申し上げます。

平成2年3月

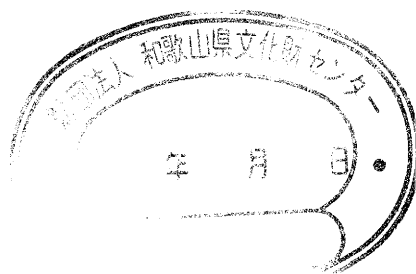
財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 仮 谷 志 良

例 言

- 1 本書は吉備町尾中地内を東西に走る尾中農道の改修に伴う田殿尾中遺跡発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、財団法人和歌山県文化財センターが吉備町から委託を受け、平成2年1月から同年3月にかけて実施した。調査面積は1380㎡である。
- 3 調査にあたっては、吉備町教育委員会、同建設課、並びに地元の方々の御配慮、御協力をいただいた。
- 4 本書の作成にあたっては、図および図版作成に窪田道代の協力を得た。また、出土遺物については和歌山市文化体育振興事業団・前田敬彦氏の御教示を得た。
- 5 遺物はすべて通し番号で表示し、本文中と図・図版の遺物番号は共通する。実測図の縮尺については37の石帯のみ現寸の1/2、その他のものについてはすべて1/4で統一した。ただし写真については任意の大きさである。
- 6 発掘調査、並びに本書の執筆・編集は文化財センター技師・村田弘が担当し、調査補助員・田伏高朗がこれを補佐した。

目次・図目次

序	図1 調査地点とその周辺……………1	図版1 遺跡遠景写真……………8
例 言	図2 溝断面土層図……………2	図版2 遺構全景写真……………9
I 位置と環境……………1	図3 遺構平面図……………4	図版3 土器出土状況写真……………10
II 調 査……………2	図4 遺物実測図1……………6	図版4 遺構写真……………11
a 遺 構……………2	図5 遺物実測図2……………7	図版5 遺物写真1……………12
b 遺 物……………3	写真1 柱穴土器出土状況……………2	図版6 遺物写真2……………13
	写真2 包含層土器出土状況……………3	



I 位置と環境

田殿尾中遺跡の所在する有田地方は、紀の川・亀の川に代表される紀北地域と日高川・会津川に代表される紀南地域との間に位置し、古代から地理的要衝の地として独自の文化を発展させるとともに他地域との交流が活発に行われてきた。

周辺の遺跡としては、野田地区遺跡・藤並地区遺跡・天満古墳群（泣沢女古墳）などがある。このうち前2遺跡については昭和56年に発掘調査が実施されているが、その際数多くの遺構・遺物が検出され、独自性と他地域との交流を裏付けるような資料が見出されている。

田殿尾中遺跡は、昭和28年7月の水害の際に表土が流出し発見されたもので、有田川の左岸、自然堤防の後背地にあたる標高19m前後の微高地に位置する。

遺物の量の多さ、規模などから、弥生時代中期から後期末にかけて有田川流域の中心的集落であったことが推定されていた。その後、昭和56年に遺跡内を横断する道路工事に伴って発掘調査が実施され、弥生時代中期から古墳時代前期にわたる環濠集落であることが明らかにされている。

今回の調査地は、下図に図示したようにこの折の調査で最も遺構・遺物の密度が高かった地区から北へ120mほど平行した地点に相当するもので、環濠の延長部分の確認や遺物の出土に十分な期待のもたれる地区であった。



図1 調査地点とその周辺

II 調 査

調査は水害後に整備された畑地（現況はミカン畑）の間を東西に走る農道改修工事に伴うもので、幅員約4 m、延長約340mを対象としたものである。発掘調査は、表土から遺構面まで平均約1 mを重機で掘削・排土し、その後は人力によって遺構掘削等の作業を行った。調査区内の基本層序は表土下40cmほどにわたって弥生時代後期から室町時代の遺物を含む茶灰色土、その下には遺構面である地山まで厚さ30cmほど植物が腐植したような有機質の黒色土が堆積していた。この黒色土には遺物は全く含まれておらずどのような状況で堆積した土かは不明である。

検出した遺構には住居跡・柱穴・溝などがあり、これらの遺構及び前述の包含層から弥生時代後期・古墳時代・中世（室町時代）の遺物が出土している。なお、調査にあたっては便宜上調査区を横断する農道を挟んで西側をⅠ区、東側をⅡ区と仮称している。

a 遺 構

住居跡（SB-01） Ⅱ区西端の北壁断面で周溝と思われる溝を確認した。また、この内側に土器が集中していることから住居跡と判断したもので、この遺構のみ前述の黒色土を切って作られている。推定6 m前後の円形住居で、出土遺物から弥生時代後期末のものと考えられる。

溝（SD-04） 南東から北西方向に走る幅2 m、深さ1.5 mを測る溝である。溝内の堆積土は礫を含む褐色土で最下層にも常時水が流れていたことを思わせる粘質土は見られなかった。

溝（SD-14） 前述のSD-04とほぼ平行して走る溝で、幅3 m、深さ1.6 mを測る。最下層から完形もしくはそれに近い形の瓦器碗が出土している。これら2条の溝は微高地の東側縁辺部に

に沿って掘削されており、この溝の東側では遺構がほとんど検出されないことから集落の西を区画する溝であったことが

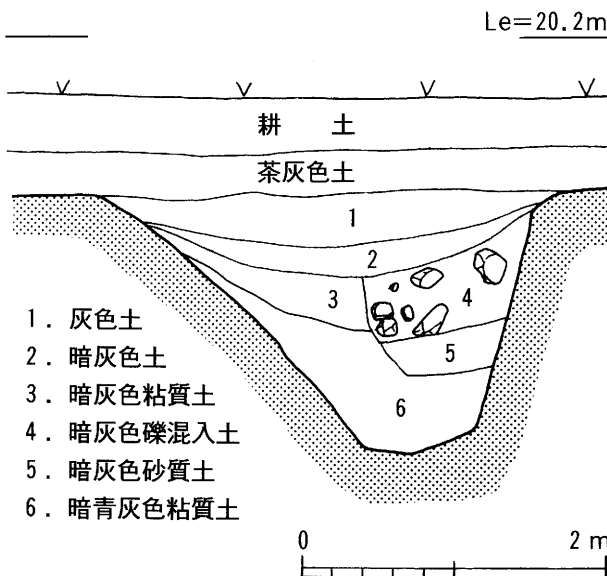


図2 溝（SD-14）断面土層図

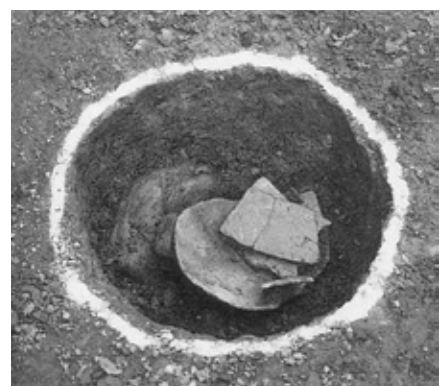


写真1 柱穴（Pit-10）土器出土状況

Ⅱ-44

考えられる。とりわけSD-04については規模、方向などから昭和56年の調査で検出された環濠の延長部分とも考えられる。ただ出土遺物からみると今回検出した溝には弥生時代中期のものは含まれていないなどの差異も見出され、直接つながるものか否かは断定できない状況である。とりあえずここでは今回検出した溝が環濠の可能性のあることのみ指摘しておきたい。

b 遺物

出土遺物は先述したように弥生時代後期後半から古墳時代初頭（布留式平行期）のものと中世13世紀を中心とした時期の遺物に大別することができる。また、量的には少ないが黒色土器（B類）なども出土しており、後述する石鐐帯も含めて平安時代の製品も散見する。

このうち弥生時代後期後半段階の製品と考えられるものは（5・19）など甕の底部が明瞭な平底となっているものがあげられよう。（5）のタキはやや特異で幅広のものが斜上方向に施されている。壺では（11・16）などがやはりこの時期のものと考えられる。（1）の鉢は小型の製品で器高に比して底部が広く、口縁部が外反する。あまり類例の見ないものだがやはりこの時期に帰属するものと思われる。

これらより若干新しいものとして（6・12）の甕、（10）の高坏、（14）の壺などを考えている。甕のタキ目は屈曲部より上方におよび、口縁部をわずかに上方につまみ上げるなど庄内平行期の特徴が認められる。ただ、和歌山県内では弥生後期と庄内期の区別が明瞭ではなく、これらの製品についても庄内を含めた弥生後期後半～末段階の製品と考えてよいものと思われる。布留式平行期のものとしては高坏（2）、二重口縁の壺（3）、（15・18）の甕などがあげられる。以上述べた製品はいずれも胎土・技法などから在地の製品と考えられるもので、他地域からの搬入品は認められなかった。

（8）は須恵器の甕で、大きく外反した口縁部下に断面三角形の凸帯が巡る。（9）も須恵器で一段の透しの入る高坏となるものである。

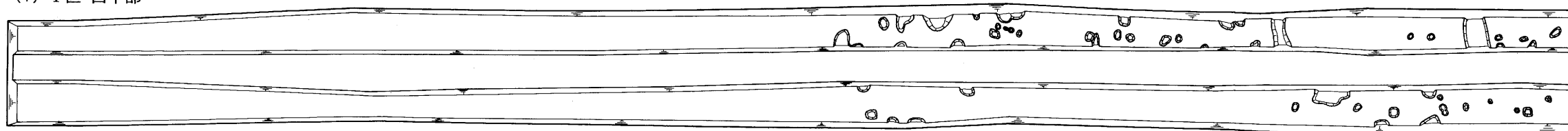
いずれも須恵器の中では古く、初期須恵器の範疇に入るものと考えている。瓦器碗（30～36）はいずれも内面底部に連結輪状文が施されており、高台断面は三角形を呈する。13世紀後半の製品であろう。（37）は石製（粘板岩？）の帯金具である。一部欠損しているが鉈尾となるものである。穿たれた穴は貫通しておらず未製品と考えられ、時期的には9世紀末ないし10世紀前半代のものと思われる。



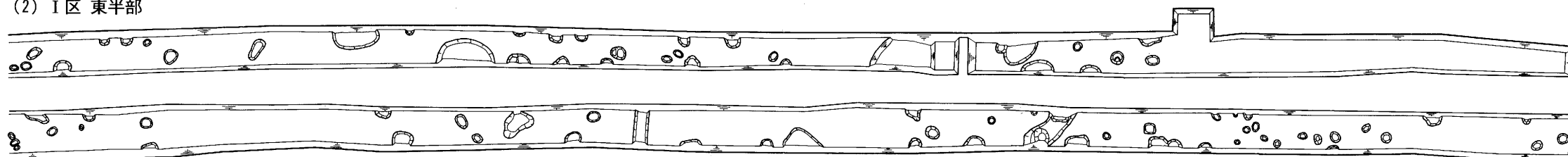
写真2 包含層土器出土状況

M4-33

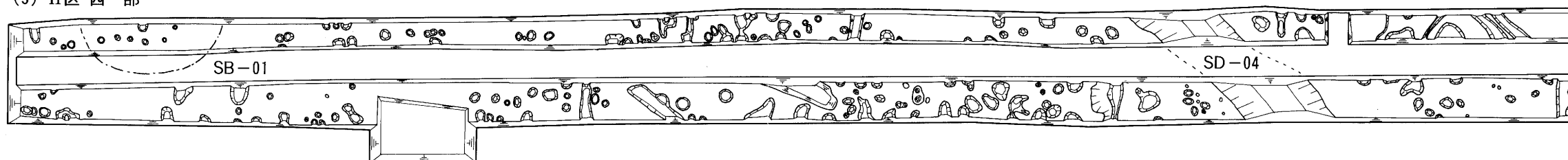
(1) I区 西半部



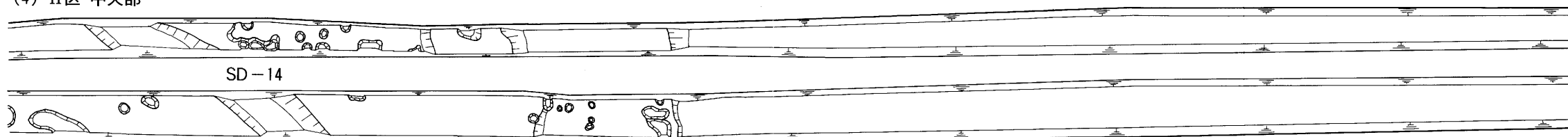
(2) I区 東半部



(3) II区 西 部



(4) II区 中央部



(5) II区 東 部

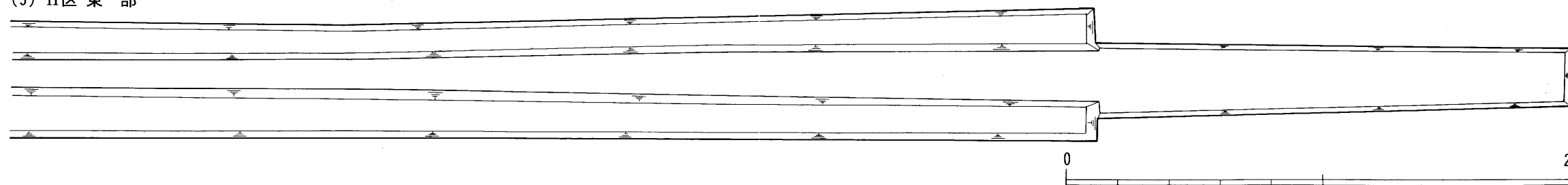
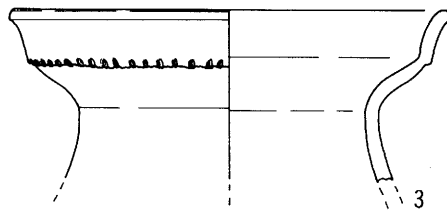
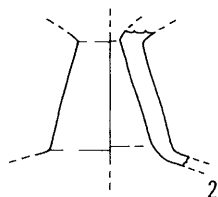
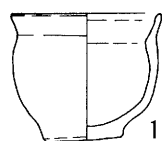


図3 遺構平面図

圖 4 遺物實測圖 1

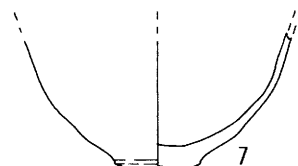
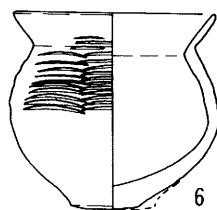
包含層出土遺物



Pit-135 出土遺物



SB-01 出土遺物



SD-04 出土遺物

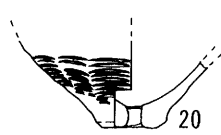
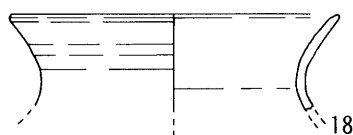
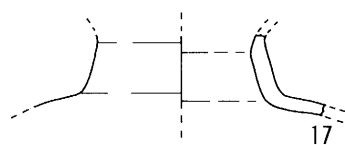
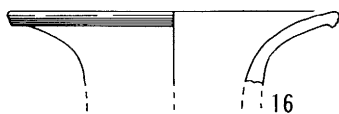
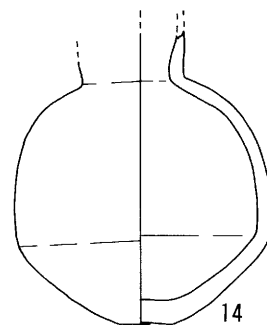
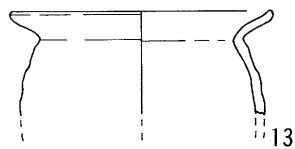
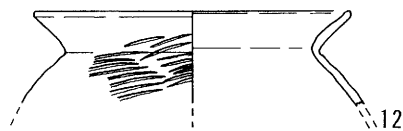
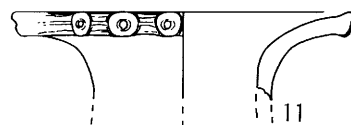
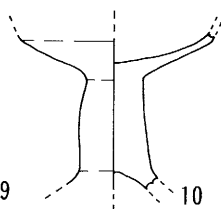
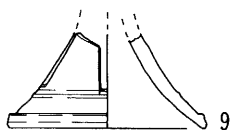
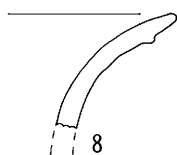
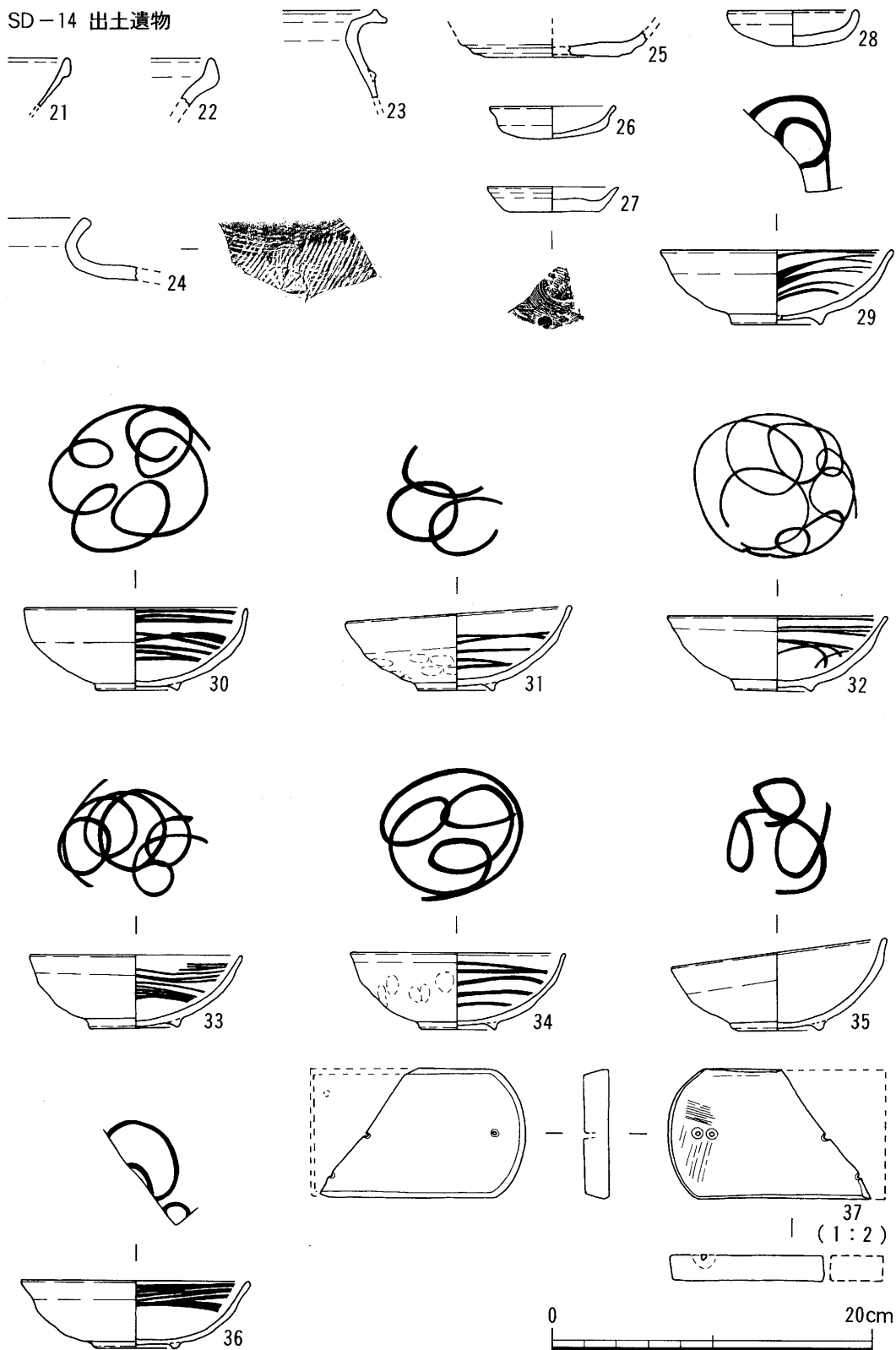


図5 遺物実測図2

SD-14 出土遺物



図版1 遺跡遠景写真



■2-21 遺跡遠景（北から）



■2-16 遺跡遠景（南から）



M 1 - 23

I 区 遺構全景 (東から)

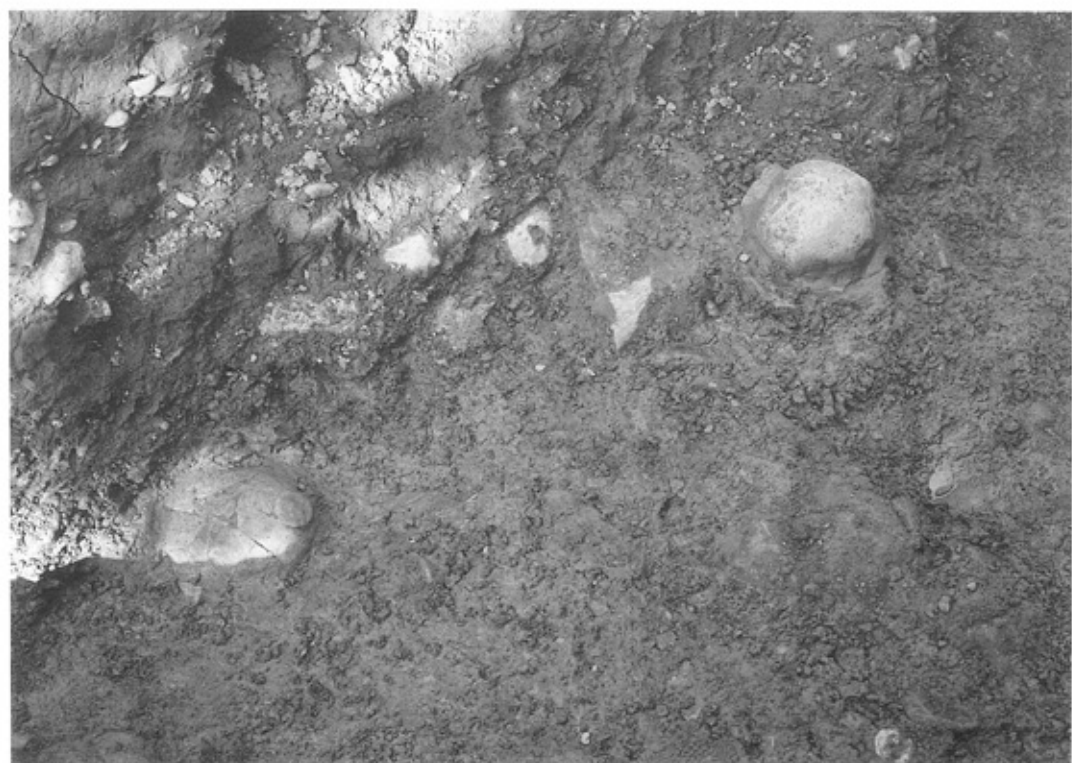


II 区 遺構全景 (西から)

図版3 土器出土状況写真



SD-04 上層土器出土状況（西から）



SD-04 下層土器出土状況（東から）



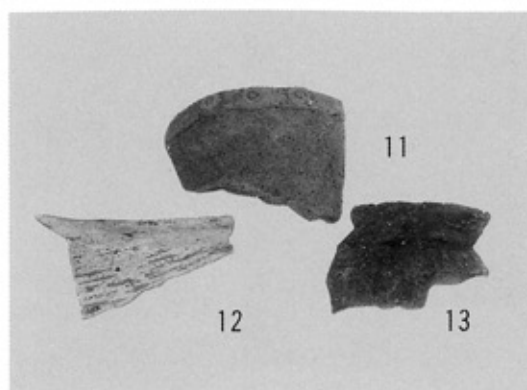
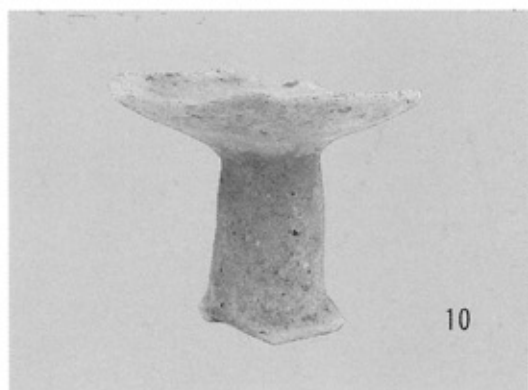
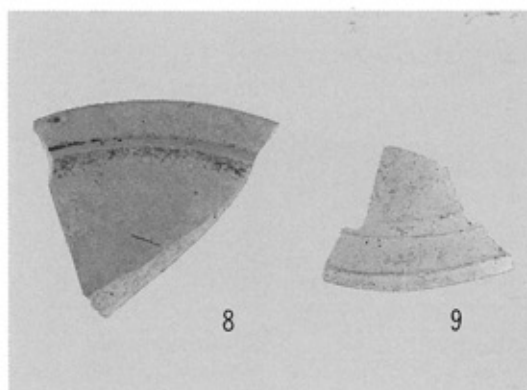
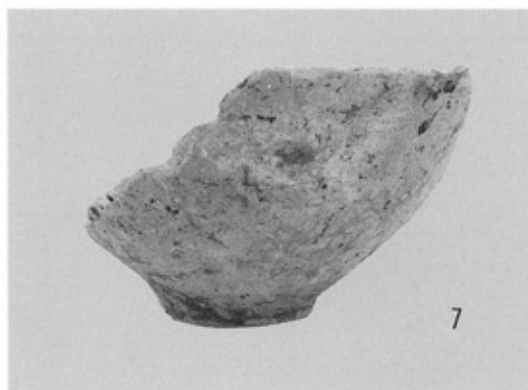
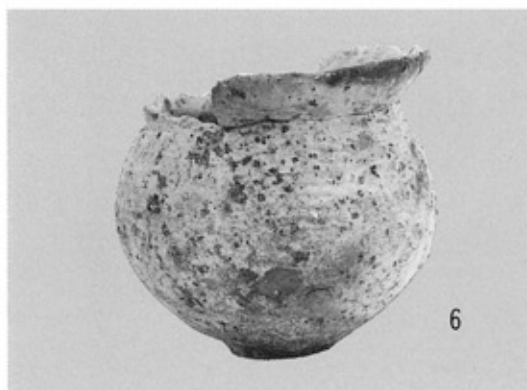
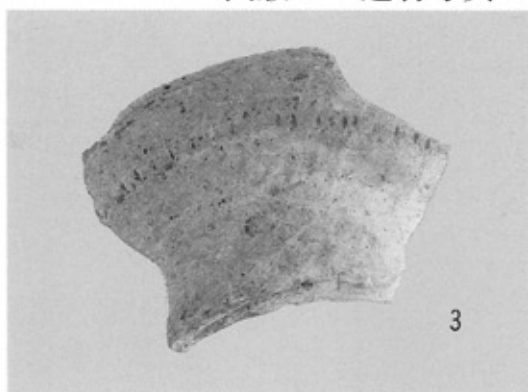
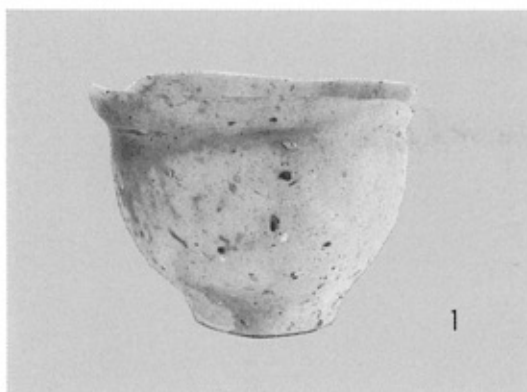
SD-04 (北から)
Ⅱ2-7

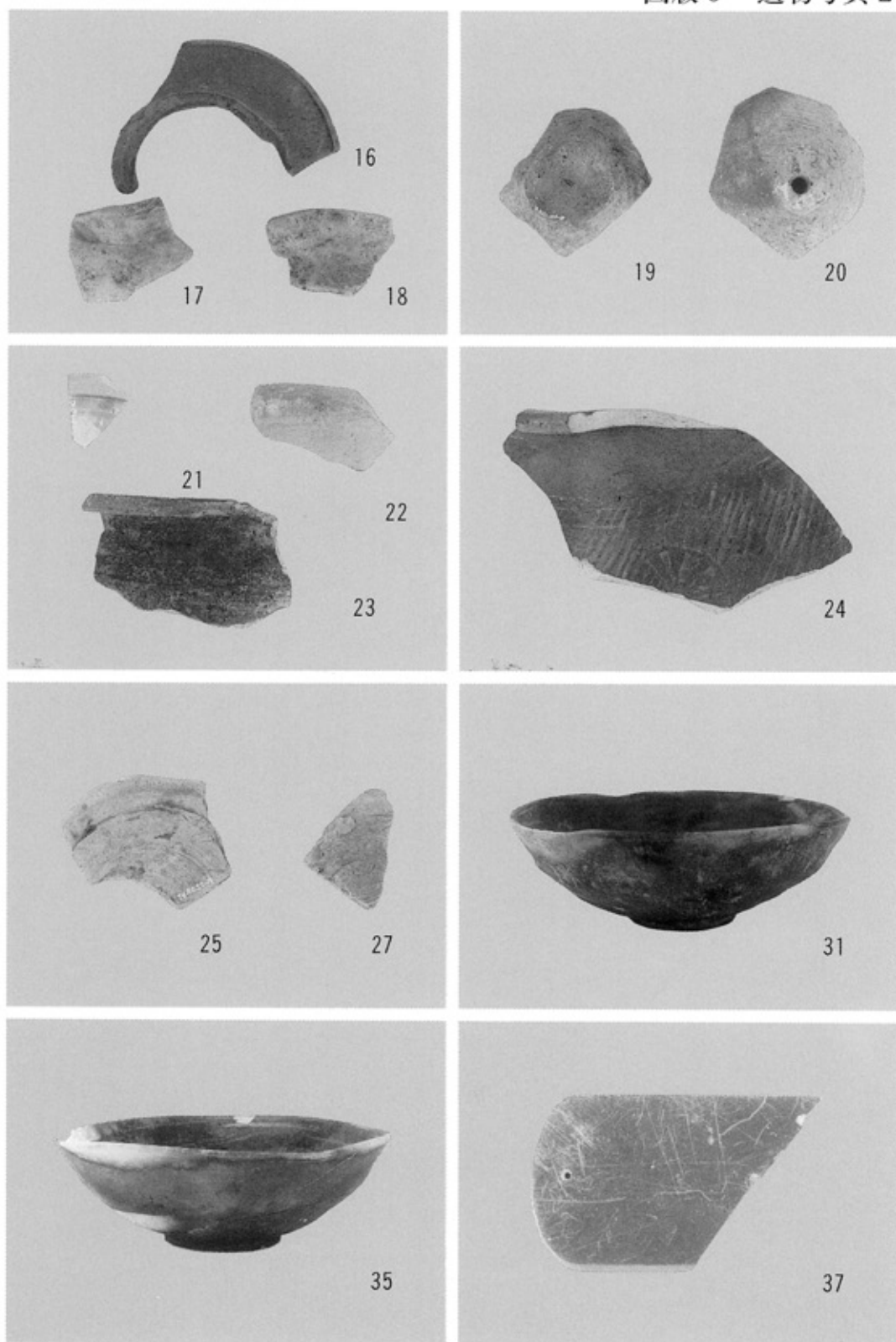


SD-14 (北から)

Ⅱ2-4

図版5 遺物写真1





田殿尾中遺跡発掘調査概報

平成2年3月

編集
発行 財和歌山県文化財センター

印刷 西岡総合印刷株式会社